兵庫県南部地震の救援活動について

迅速対応可能にした「献労奉仕」の伝統と教風

未曾有の大災害をもたらした兵庫県南部地震。被災地では復旧活動が進むなか、今も多くの人々が避難所での生活を余儀なくされている。今回の地震で大本教団（出口聖子教主）では、地震発生の当日午前九時にいち早く「災害救援対策本部」（本部長＝植村彰大本本部長）を設置。翌朝から「災害救援奉仕隊」が連日のように被災地の避難所へ救援物資を送り届けている。植村本部長もこれまで二度、現地入りして救援活動の陣頭に立った。大量でなくとも今、どこにいる被災者に何が必要か―現地の役所や信者の声を聞きながら進める迅速、機敏な救援活動は、大本の歴史の中で培われてきた「献労奉仕」の精神の所産であるといえよう。植村本部長にこれまでの救援活動を振り返ってもらうとともに、今後の取り組みへの意欲について聞いてみた。

大本・植村彰本部長に聞く

－地震の被害は想像を絶する規模になりました。

植村　地震で亡くなられた方々には心からお悔やみ申し上げたい。また被災者には元気を出してくださいとお見舞い申し上げたい。家屋の倒壊や避難者も相当数にのぼり大変な出来事でした。私も現地に入りましたが言葉もありません。

－地震の当時、本部長はどちらに。

植村　自宅（京都府亀岡市）におりました。亀岡に住んで四十数年になりますが、あれほど大きな地震は初めてでした。飛び起きて“かつてない地震だな”という実感でした。すぐテレビのスイッチを入れると、放送が始まっていて各地の震度が出ている。“これはひどい。(大本）本部はどうなったか”と電話を入れると宿直が出てきて、本部には大きな被害はなさそうでした。

一方、テレビは刻々と地震報道を続けており、これはすぐ対策を講じなければ、と午前九時に本部内に対策本部と事務局をつくりました。まず現地の様子がわからない。神戸方面には約五百世帯の信者もおり、本部派遣の特派宣伝使（近畿第二教区担当）で当時、大阪にいた中里（友彦氏）に現地の調査を命じ、すぐ派遣しました。

ある程度の状況がわかったのは昼過ぎで、まずは安全と復興を祈る祈願祭を亀岡、綾部、東京の各大本本部で夕拝（午後五時）後に執行しました。

また、救援物資の購入も始めるとともに、電話で信者さんの安否確認を開始しました。

役立った出来たて「マニュアル」

－翌十八日から本格的な救援活動に入られましたね。

植村　大本本部では昔から「献労奉仕」が一つの教風になっています。私も昭和二十年代の亀岡地方の大水害などで、救援活動や被災者の受け入れにあたりましたが、昭和三十年代後半からは若い職員らで本部に献労奉仕隊を組織して、教団内外で活動を続けてきました。

これまでも伊勢湾台風をはじめ全国で台風、火山噴火、水害など災害が発生するたびに人を派遣したり、救援物資を送ったりしてきました。平成二年一月、伊根町（京都府与謝郡）で貨物船が座礁し、海に油が流出した時も四十人くらいが駆けつけて手で油をとっていましたよ。

冷夏や干ばつなど世界的な異常気象を受けて昨年のはじめ、教主が「本部における救援体制は必要」という見解を出されたので、献労（救援）奉仕隊を改めて整備し、ちょうどマニュアルを作り上げたところでした。

－それが今回の地震で活かされた。

植村　ええ。十八日の午前八時半に「災害救援奉仕隊」を結成し、第一次救援隊を被災地に派遣しました。神戸の高台にある大本神戸本苑（神戸市兵庫区）の建物は倒壊しているとのことでしたし、信者さんの安否確認にも時間を必要としましたが、災害が甚大ですから、まず救援物資を送ることにしたのです。とにかく「全員でやろう」ということで班編成をしました。

これまでも各地へ救援物資を送ってきた大本直心会や人類愛善会が毛布など救援物資をもっておりましたので、まずそれを送りました。現地の災害対策本部に持ち込んだのですが、当初は対策本部ももたもたしていましたので直接、避難所にもっていった方が喜ばれました。

幸い六甲の裏手にあります神戸本苑百千分所（神戸市北区）の被害がなかったのでそこを現地の拠点にして被災地に入り、信者さんの安否を確認しながら救援活動を続けました。十八日には救援基金の募金活動を行なうよう全国に指示しました。

－本部長は二度、現地に入られていますね。

植村　二十三日に最初に現地入りしました。避難先の学校の先生をしている信者さんから、“食料も水も不足しているが一番、不便なのはトイレだ”と聞いておりましたので、ポータブルトイレを買いまして現地へ行きました。

電話も次第につながるようになり、現地の各災害対策本部や個々の信者さんと連絡をとりながら必要なものを準備していきました。

長い目で復興支援

信者であろうとなかろうと

－信者さんの様子はいかがでしたか。

植村　いま百数十世帯が避難生活をしており、四世帯は本部に避難されています。家を全壊したり、焼失した信者さんはいましたが、本人やその家族の生命に異常がなかったことはせめてもの救いでした。

家が倒壊して学校に避難し、母子でテント生活をしている信者さんがあるのですが、親子ともその避難所のリーダー格の世話役でした。こんなことで落ち込んではいけない、復興しなくてはと意気軒昂で明るい明るい（笑い)。それに触発されて他の被災者も元気になる。驚きました。

二十七日には被災した信者さんのお見舞いを中心に再度、現地入りしたのですが、こういうふうに大本信者がみな明るく、復興に力を注いで精神的にもり立てていたのは、我々にとって救いだなぁと思いました。

また県外の信者さんからの受け入れの話などもあるのですが、ここで生まれ育ち、生活しているのだから神戸を復興したいと。神戸を愛している人が多いですね。

今回の地震で被災した方々は人の情の有り難さを実感されたのではないでしょうか。その点からも救援活動や救護活動は絶対必要だし、大本信者であろうとなかろうと同じようにさせてもらわなければならない、としみじみ感じました。

このほか近畿圏の各教会からも物資が届けられていますし、全国から義援金が続々と寄せられています。大本の全国の組織をあげての救援活動が迅速な対応につながった理由の一つだと思います。

－今後の大本の取り組みは。

植村　今年の大本は教主御還暦および御就任五周年、第二次大本事件解決・大本新発足五十年という大きな盛り上がりの年であり、五月三日には「梅松祭」を執行し、いろいろな祝賀行事の開催を予定していました。しかし教主から“質素にしてほしい、祝賀会などは自粛したい”とのお言葉がありましたので、厳粛な祭典・行事は行なうが、祝賀ムードは厳に慎むという方針を固めました。

人類愛善会も創立七十年という大きな節目にあたりますが、祭典はしっかりやるものの祝賀会は自粛する方向で

動いています。また六月九日（同会創立記念日）には大江健三郎氏の講演会を京都国際会議場で予定していましたが、これも中止することになりました。

先日、大江氏とお会いしましたところ、「こういう時期ですし、本部でそういう方針を決められたのなら私も大賛成です。私も自分の人生の最後のページですから内容的にも高めていきたいと思い、随分、講演の依頼があるのですが全部、断わっています。今回の話は早くからお受けしていましたが、それよりも復興活動に全力を注いでほしいと思います」と、おっしゃって、快く了解していただきました。

こういった形で教団のエネルギーを救援活動に振り向けていきたいと考えています。復興まで時間がかかるでしょうが、長い目で継続的に支援活動を続けていきたいと思います。

被災信者の“明るさ”が救いと語る植村本部長［写真は省略］

地震被災者の宿泊

寺族、門信徒は無料に

西本願寺門前の旅館、ホテルで

二月末まで受け入れ中

京都市下京区にある浄土真宗本願寺派の本山本願寺の門前町、西地区の旅館、ホテルの集まり「相愛会」(会長＝太田隆輔・太田新館館主）では、二月から、今回の兵庫県南部地震で被災した本願寺派の寺院の寺族や門信徒らを同会加盟の旅館、ホテルに無料で宿泊を受け入れている。

被災者の無料宿泊を受け入れるのは「相愛会」に加盟する十四の旅館、ホテル。被災者の本願寺派の寺族、門信徒を無料で受け入れる。期間は二月末までの一ヵ月間で、宿泊は原則として二泊。宿泊料金は無料だが、食費は実費負担。

被災者受け入れに先立って「相愛会」が行なったアンケート調査では、一旅館・ホテル当たり平均して二週間から三週間、六、七室を被災者用に提供する予定で約二百人を受け入れることができるとしている。

宿泊を希望する被災地の寺族、門信徒は所属組、寺院、代表者名、人数等を明示して本題寺宗務所内の参拝部（電話＝〇七五・三七一・五一八一）を通じ同会事務所のホテル緑風荘（電話＝〇七五・三四一・七二〇一、ＦＡＸ＝〇七五・三七一・二六七一）か、または直接各旅館、ホテルに申し込みのこと。

太田会長は「日頃からお世話になっている本願寺の寺族やご門徒の方々が多数被災されたことに心からお見舞い申し上げます。我々としては宿泊施設を開放して一人でも多くの方々にご利用して頂きたいと思っています」と語っている。被災者特別受け入れを実施しているのは次の各旅館、ホテル。カッコ内は電話番号（市外局番は全て〇七五)。

▽ホテル緑風荘▽ちどり旅館（三五一・三四五五）▽きし田旅館（三七一・二四九四）▽尾張屋旅館（三六一・五三六一）▽和泉屋旅館（三七一・二七六九）▽旅館あづまや（三七一・二三六四）▽魚岩旅館（三七一・四九一〇）▽太田新館（三七一・五四二一）▽京の宿洛兆（三五一・二八〇一）▽ホテルニュー松栄（三五一・四〇八四）▽滝野旅館（三七一・六二七七）▽旅館みよし（三五一・八〇六五）▽大遊旅館（三七一・二七三五）▽やまと旅館（三七一・二四六二）

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)